



愛研技術通信



尾張旭市「維摩池」(2008.11.30)

掲示板:法令・告示・通知・その他

土壤汚染対策法改正へ 環境省の審議会が見直し案まとめ

我が国では、重金属、揮発性有機化合物等による土壤汚染対策は、2002年にできた土壤汚染対策法に基づいて行われている。同法は、土地所有者などに土壤汚染に関する状況の把握と報告、調査などを義務づけ、汚染が見つかった場合、都道府県知事が区域を指定して公表することや、汚染の拡散、不適正処理の防止などについて定めている。このような法に基づく調査は、平成20年8月31日現在までの同法施行後5年間で1035件が実施された。いっぽう土地売買や再開発などの際、同法の制定をきっかけに自主調査によって発見される土壤汚染が増えており、その数は同法が施行された2003年からの5年間までに1300件を超え、このうち指定基準を超過した事例は約半分を占めたという。また、掘削除去に伴う搬出汚染土壌の適正処理なども課題だ。

環境省は、同法の見直しに関する議論を中央環境審議会土壤農薬部会の小委員会で行い、このほど「今後の土壤汚染対策の在り方について(案)」をまとめた(環境省、平成20年11月14日)

見直し案のポイントは、土壤汚染について自主的な調査の結果、汚染状態が指定基準を超過していることがわかった場合は都道府県知事に報告し、調査方法が公定法を満たす時は法に基づく調査と見なすとしている。公定法を満たしていない時は、周辺への健康被害が心配される場合や、宅地造成など土地の形質変更を行う際に都道府県知事が調査を命じる。

また、汚染区域を汚染状況に応じて次のように分類することで、合理的な対策を行うとしている。

ア 健康被害が生じるおそれが低い場合、採取経路を遮断する対策(盛土、舗装、や封じ込め等)は不要な区域。形質変更届必要。

イ 健康被害が生じるおそれがあるため、採取経路を遮断する対策や場合によっては掘削除去が必要な区域

ウ すでに採取経路を遮断する対策が講じられた区域。

そして、土壤汚染対策の結果に関して、地方自治体が対策の効果を確認して区域の解除や公表を行い、それらの情報を活用するとしている。さらに、搬出された汚染土壌の適正処理を義務づけ、運搬や保管、処分に関する基準を定め、搬出汚染土壌管理票(汚染

土壌マニフェスト)による確認も義務づける。また、自然的原因による汚染土壌の適切な管理や、汚染土壌が不適正に処理された場合の是正命令、罰則などの規定を整備するとしている。このほか、次の事項を定めるとしている。

- (1) 指定調査機関の信頼性を確保するため、管理者の資質の向上、指定の更新制度の導入
- (2) リスクコミュニケーションを促進するため、ガイドラインの充実、人材の育成
- (3) 土壌汚染調査・対策手法の充実と低コスト化
- (4) 操業中の工場などへの対策の支援
- (5) 法に基づく土壌汚染対策基金を活用した助成制度の充実
- (6) 中小企業の土壌汚染対策（調査を含む）への支援

ガスなど大気汚染対策強化 「PM2.5」に環境基準

環境省は、ディーゼル車の排ガスなどに含まれ、肺がんの増加など人の健康に影響を与えているとされる微小粒子状物質「PM2.5」の大気中の濃度について、新たに環境基準を設定する方針を固めた。近く中央環境審議会に諮問し、来年中にも基準を作る。

PM2.5の規制は、欧米などで既に設定されており、昨年、東京大気汚染訴訟の原告らが和解交渉で基準設定を要請したのを受け、同省が検討してきた（愛研技術通信、第8号）。

今年3月には一定濃度のPM2.5を長期間吸い込むことで、肺がんによる死亡率が約1.3倍になるとの大規模調査結果を公表。同省の専門家会合は先月「PM2.5は非常に微小であらゆる場所に漂っており、すべての人が避けられず、公衆衛生上、健康影響を軽視できない」と結論、基準設定の是非を環境省にゆだねていた。

環境基準は「環境基本法」に基づき、大気中のさまざまな物質について健康や生活環境を守るために望ましい濃度を示す。現行の基準では粒径10μm以下の浮遊粒子状物質（SPM）については規制があるが、極めて小さいPM2.5は検出技術が未成熟だったことや健康への影響が不明だったため、規制の網から漏れていた。

今後は海外に既にある基準を参考に、年間平均（長期）と1日あたり（短期）の許容濃度を検討する。またPM2.5の濃度を低減させるための対策も課題となる。

（解説）

従来からは大気中に漂う粒径10μm（1μm=0.001mm）以下の粒子を浮遊粒子状物質と定義して環境基準を定め対策を進めてきているが、そのなかで粒径2.5μm以下の小さなものを微小粒子状物質と呼んでいる。発生由来でみるとディーゼルエンジン、工場・事業場での燃料の燃焼などからの一次粒子（粒子の形で大気中に排出されたもの）と、ガス状で排出されたものが大気中で反応生成してできた硫酸塩、硝酸塩、揮発性有機化合物から生成した有機炭素粒子などの二次粒子がある。

微小粒子状物質は粒径がより小さくなることから、肺の奥深くまで入りやすく健康への影響も大きいと考えられている。具体的には、喘息、気管支炎あるいはせき、喘鳴などの症状や動悸、呼吸数の増加、不整脈、心臓発作などの症状の原因とされている。また、ディーゼル排気微粒子もこの中に含まれることから、発がん性も懸念される。

アメリカでは1997年7月に、主として呼吸器系疾患についての人への健康影響に着目して大気環境基準を定めている。その値は、年平均15μg/m³、24時間平均65μg/m³となっている。

世界保健機関（WHO）が2006年、1立方メートル当たり10μgの環境目標値を設定する指針を公表している。

「第2回維摩池自然観察交流会」参加報告

大屋 渡

去る11月30日、NPO法人 心豊かにARD（あるど）の会の主催による標記イベントがあり、会社として、運営スタッフの一部という立場で参加して参りました。これは「企業とNPOの協働による環境活動」として、世間的にもなかなか画期的な取り組みであると共に、参加者個人としても大いに刺激を受け、面白い体験となりましたので、経緯も含めて報告いたします。

直接のきっかけはこの10月、愛知県環境部が公募しました「企業とNPOの協働による環境活動モデル事業」の一環である「マッチング交流会」に会社として応募したことでした。おそらく愛知県が今回の公募に至るには、平成15年7月の「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」の成立など、近年の環境保全活動推進の脈々とした流れがあったと思われるのですが、個人的に、森林インストラクターという資格を社会人になってから取得するなど、そういう流れに以前から強い関心を寄せていた私は、今回、専務から「マッチング交流会」の話聞いた時、実は「これは面白い！」と心が躍ったのでした。

その中で、偶然にも近所にある「心豊かにARD（あるど）の会」が、自然観察交流会に協力してくれる企業を探していることを知ります。私には願ってもない話でした。問題は、この大変難しい社会情勢の中、会社が、このようなボランティアの話に乗ってくれるかどうか...私の心配は杞憂に終わり、あっさり？許可が出たのです。さすがは愛研。様々な会社を渡り歩いた私は、この時ほど「いい会社に入ったなあ」と思ったことはなかったかも知れません。初めての試みで、休日の活動になるということ以外、具体的に何をすることも未定の状態だったのに、メンバーも早々に集まりました。石神昇氏、石田みき氏、加藤良樹氏といった中堅実務者に、壁谷聡氏、三木智弘氏といった新人さん...いや、愛研の将来は有望に違いありません！

主催者との打ち合わせを重ねる中で、今回の私達の加入にとっても期待してくれていることが伝わってきました。こうなると、やはり「愛研ならではの」貢献をしたい、と思うようになりました。そこで、従来から予定されていた自然観察指導員の解説による自然観察に加えて、「水質調査体験」のメニューを主催者に提案したところ、これまた大歓迎されました。具体的には、水温、透視度、pH、ECの実演と体験です。...ここで、私の誤算は、実は普段の森林インストラクターのクセで、講師役を一人でやる計算をしたので、予定時間を「20分」と言ってしまったことでした。

その後、当日の「体験実演」を具体的にどう進めるかを考えているうちに、私はふと昔のことを思い出しました。社会人になって1年か2年目だった駆け出しの頃、教育係も兼ねていた上司は、小学校の環境学習やら、市民を対象とした環境講座やら、講演会や

ら、とにかく技術屋として人前に出る機会を私に次々と与えてくれました。当時はただ必死にこなしていましたが、今思うと、あれが、自分の原点になっている。私はその上司ほど立派ではありませんが、愛研の将来のためにできることがあるだろうと。また、たぶん、様々なキャラクターが出てきた方が、参加者も面白いのではないかなと。早速、その上司がそうしたように、私は、さも当然のように「講師役」をメンバーに振り分けていきました。壁谷氏と三木氏に水汲みと水温、石神氏に透視度、石田氏にpH、加藤氏にEC...皆さん、ちょっととまどったようでしたが、快諾してくれました。...いや、愛研の将来は有望に違いありません！

具体的準備は、本番の前々日に、実行するにあたってのポイントを書いた手書きの「実施要領書」を配って、こんな感じで、と少しだけ手本？を示して、あとは、皆さんの創意工夫に任せました。皆、とても前向きで、自ら勉強し、準備を工夫しているようでした。有能な人たちだとわかっていたので、何ら不安はありませんでした。ただ、時間配分だけは、相当苦しくなるかなあと、自分のミスを悔やんではいましたが。

いよいよ当日の朝を迎えました。放射冷却も起こる良い天気、参加者は40名弱とこの種のイベントとしては良好、本部テントが置かれ、なかなか本格的です。「心豊かにARD(あるど)の会」の実力を再認識しました。愛研関係者も、講師の家族のほか、パートナーも顔を出してくれました。ありがたい限りです。挨拶等の開催行事に引き続き、早速愛研の出番です。私は挨拶と全体説明を担当しましたが、やはり、何回やっても、なかなかうまくしゃべれないものです。参加者の気持ちを引き込むことができないというか...早々に退散して、あとは、講師の皆さんにお任せすることになりました。

水汲みと水温は、グループごとにバケツに手を入れて水温を当ててもらおう「ゲーム」をしたのですが、壁谷氏と三木氏は、実に「いいお兄さん」でした。「やっでごらん」という言葉と親しみの持てる雰囲気、子供たちを中心にガヤガヤが始まり、「何か面白いこぞ」という雰囲気が生まれました。せっかく盛り上がったところで、水温について気の効いた解説を準備するのを忘れてきた私自身は落第でしたが、ただ、ここで、すでに15分ほど過ぎていました。私は焦りだしました。

ここで、石神氏の透視度。これが、憎いほど参加者を引き込むのです。「やってみたい人」として手を挙げた人の名前を紹介して、拍手...場が盛り上がります。丁寧な進行です。私よりもはるかに上手。文句のつけようがありません。早くしてくれ、とは口が裂けても言えません。続いて石田氏のpH。丁寧に作られた資料をもとに、丁寧に解説していきます。pHを理解しようとする人には最高のプレゼンではなかったでしょうか。大人たちが「ほ～」と声を上げます。これも止めるわけにはいきません。私はいよいよ焦っていました。経過時間すでに40分になろうとしていました。



写真1 水温計の目盛りを読む参加者たち



写真2 ハーブティーにレモンを加えて変化するpH測定

ここで、プログラム全体を管轄する主催者スタッフから申し入れがありました。加藤氏が説明を始めようというところで、残念ながらストップ。ごめんね、加藤氏。結局、加藤氏のECは、当日のすべてのプログラムが終わってから、「おまけ」ということで5名程度の一般参加者を前に行うということになりました。それにしても、歳の割に、ずいぶん落ち着いた講師ぶりでした...また次の機会になりますが、たとえ大勢を前にしても、全く変わらないのではないかなと思われれます。彼は、きっと大物になるでしょう。

愛研のプレゼンを総括すれば、やった意義はあっただろうと。参加者は比較的環境への関心も高い人々だとお見受けしましたが、調査そのものは全く見たことがないのが普通で、目の前の環境がどういふふうの数値として記録されていくのか、その数値がどういう意味を持っているのか、初めて聞くといった方が多かったと思われれます。その分、水道水の透視度はどのくらいなのか、そういう透明なもの濁りはどうやって把握するのか、池のpHが変わる要因にはどのようなものがあり、きれい、きたないという話とどうつながるか、など、踏み込んだ質問もありました。これは、講師を担当したそれぞれにとっても、大変刺激になることでした。報告する数値の向こう側に、具体的にどのような人がいるのか、普段はなかなか伺い知ることができませんが、これは直接知ることができる機会となったのです。

なお、イベントそのものは、その後、自然観察指導員の解説のもと、好天に輝く池の周囲を散策しながら、植物や鳥を観察し、続いて手作りの素晴らしい景品が用意されたビンゴゲームなど、大変楽しい内容で、ビンゴゲームでは一般参加者を差し置いて「愛研さん」が「リーチ」や「ビンゴ」を叫ぶ姿が印象的でした。このとき、「お茶会」と称して、石田氏が準備した温かいハーブティーが皆さんに振舞われました。このハーブティーには「仕掛け」があり、pH(レモン)により鮮やかに色が変化するという「おまけ」付きでした。あまりの鮮やかさに私も感心しました。こういう隠れた才能？が発揮されるのも、普段の業務とは異なるイベントの楽しみかもしれません。

ちなみに、この「維摩池」ですが、森林インストラクター的視点から見ても、無節操と言えば言葉が悪いですが、異なる性質の樹木が共存していて大変面白い場所でした。水質的にも、モニタリングを重ねていくと、新しい事実が見えてくるかもしれません。周辺環境も森林と市街地に挟まれ、なにやら面白い状況になっていますから。そして何よりも、講師としての仕事をする愛研職員の変化が大いに楽しみな状況であります。

講師をはじめ、参加者の皆さん、主催者の皆さん、大変ありがとうございました。次回は、3月ごろの実施が予定されているとのことです。今回の反省を次回に生かすとともに、皆さんの、いっそうのご参加をお待ちしております。

それでも可愛い同居人

高木 俊彦

現在、我が家には2匹、いや二人かもしれない同居人（あえて）がいる。一人が「マロン」君、もう一人が「ココア」君と言うトイプードル種のワンチャンである。マロン君とはもう4年になり、ココア君とはまだ4ヶ月しか経っていない。数年前まで我が家はテナントの一角を借り美容室兼居酒屋を営んでいたのである（経営者は奥様）が、今は一軒家の美容室に落ち着いています。そのテナント時代、マロン君はまだ小さく躰もあまりしていなかったので店の中いたるところでオシッコ、ウンチをして後始末が大変でしたが、お客にはよくなついて食べ物を買ったりでとても人気があったのです。しかし突然、性格が



マロン君

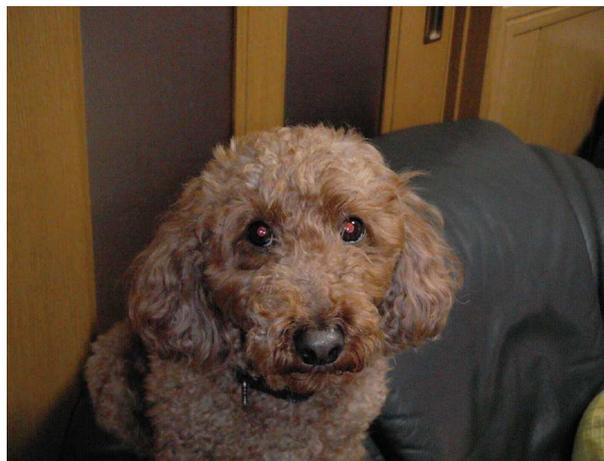
いきなり ガブッ！！こちらも気を付けてはいるが年のせいか、彼の行動の早さに負けるのです。

そんなわがままなマロン君を夏に近くのホームセンターに連れて行った時の事である。

ペットショップのコーナーで、なんだか毛がポーポーでほりっぽそうで大きなドブネズミかと思わせる様な生き物がこちらを向いて一生懸命に愛嬌をふりまき、見えているのか見えていないのか、毛で覆われた奥の方から小さな可愛い真っ黒い瞳がこちらを見ているのであった。それに気づいたマロン君は一気にそいつに近寄り、尾っぽをち切れんばかりに振っているではありませんか！「新之助」君にやつつけられてからの彼は自分たちの仲間を嫌うようになっており、道ですれ違う犬に吠え、喧嘩を仕掛けるような仕草をする少年になっていたのです。そんなマロン君がこんなに喜んでいるのならと、思い切ってその犬「ココア」を同居人とすることにしましたのです。

同居人となった「ココア」君はあのみすぼらしい様な風貌から一変、多少は小奇麗になり、今はとても手の付けられないヤンチャな園児ばりに家、公園をマロン君と一緒に走り回っているのです。なにが幸いしたのかマロン君の噛み癖がこのごろ少なくなり、我々もほっと一息している現在です。

変わったのです。実は私の実家がすぐ近くにあり、そこにはもう16年目の「新之助」君と言うこれもまた「我が輩は人間である」と言う様な面をした、いや何となくこいつは「人間」か？と思わせる行動をする柴犬がいるのです。この二人が初めて顔を合わせた時から敵対意識むき出しになり、マロン君はそれ以後、気に入らないことが出来ると誰彼かまわず関係なく、噛むようになり、ごく最近まで手が付けられない状態だったのです（それでも可愛いのである）当然、夫婦揃って被害者です。つい今の今まで撫でてやり、遊んでやりのご機嫌うるわしかったのが「しつこい！！」と言わんばかりに「ウー」と唸り出し、



ココア君



新之助君

こんな個性豊かで喜怒哀楽のある同居人なのですが、私の奥さんも羨ましがるほどに懐いてくれており、家にいる間はかた時も私の傍から離れないのです。また私もこの3人のワンチャン達となると気持ちが仄々とするのです（もちろん奥様は特別ですよ）

もし何方が我が家へお越しの折は、夫婦、同居人一同大歓迎いたしますが、マロン君には丁重にご挨拶願います。

おっと、実家の「人間」新之助君にもお忘れなく！！

新入社員紹介

三木 智弘

「2008 年を振り返って」

新入社員の三木智弘です。こうして社員として挨拶できているのは皆様のおかげです。ありがとうございます。

思い返せばこの2008年、本当にいろいろなことがありました。学会発表、大学卒業、入社、倒産、愛研にアルバイトとして採用、そして愛研に入社。どれも一生で何回もできることではない貴重な経験をしました。また、ハワイ、岡山・広島・山口、沖縄、大阪、もう1回広島、北海道と、多くの旅行ができた1年でした。

- ・ ハワイは卒業旅行で行きました。メンバー4人も初の海外旅行で、てんてこ舞い。サーフィンに挑戦して溺れました。4年間とともに過ごした仲間と最高に笑える旅でした。
- ・ 岡山・広島・山口はJRの<青春18切符>を使って、ノーブランの貧乏2人旅。宿泊はマンガ喫茶や、健康ランドを利用していたので、友達が風邪を退き4日目で強制終了。九州まで行きたかったが、残念ながら行けませんでした。
- ・ 沖縄は、行くのも初めてなのに1人旅でした。事前に有名なスポットを調べて、趣味の1つであるシュノーケリングをしてきました。今まで潜ってきた場所とは別世界で、1人で興奮を抑えるのが大変でした。今度は水中カメラで、記録としても残したいです。



沖縄首里城公園

- ・ 大阪には、SUMMER SONIC 08 という音楽の夏フェスタに行ってきました。大好きなROCKをずっと感じられる贅沢なひと時でした。
- ・ 今回の広島は、ファンである広島東洋カープの応援に行ってきました。しかも、対戦相手は中日。いつもは名古屋ドームで縮こまりながら応援していますが、この日は全開で応援してきました。最後の広島市民球場に行けて本当によかったです。来年完成する新球場にも応援しに行きたいです。絶対に行ってきます。来年こそはAクラス！！



ハワイでダイブ

- ・ 北海道には、日本陸水学会の発表を聞きに行ったので、あまり旅行をする時間がありませんでしたが、先生や他社の方々の貴重なお話をいっぱい聞くことができました。これからも興味のあるものには積極的に参加していきたいと思っています。



聖地・広島市民球場

実際には、岐阜や佐久島などほかにも多くのところに行くことができました。旅行だけでなく、いろいろなものに挑戦できた1年を過ごせました。今までで1番充実した1年でした。これからこの経験を生かし、より自分を磨きたいと思っています。

来年の目標は、早く仕事を覚えて皆さんから信頼してもらえるようになることです。この目標はまだ難しいかもしれませんが、その基礎づくりはしていきます。そのためにまず、毎日のミスをなくすこと。資格を取得すること。自分にできそうなことから少しずつ実行していきます。また、趣味ではスキューバダイビングのライセンスを取得して、潜りに行きたいです。シュノーケリングでは見えない世界まで見たいので……。あと、登山したいです。日本人なら1度は富士山に登ってみたいし、長年できそうな趣味なので、登山ルートのある近くの山は片っ端から登って行きたいです。

2009年も、どんな1年になるか楽しみです。宜しく願います。

BOX 2

尾張旭市「維摩池」の今昔

本誌にも報告があるように、過日、NPO 法人心豊かに ARD (あるど) の会の主催による維摩池自然観察交流会が開催され、弊社もそのイベントに参加しました。行ってみると、しっかりと護岸などの環境整備や道路整備がなされ、尾張旭市民のウォーキングコースの一つになっており、散歩はもちろん、ウォーキングする人や、また格好の釣り場になっているせいか、釣り人も多く(表紙の写真) 市民の憩いの場所として親しまれているようでした。

この尾張旭市「維摩池」付近は、犬山市、瀬戸市、豊田市、岡崎市から蒲郡市を結ぶ帯状の里山分布を形成する丘陵地帯に位置します(愛知県環境部、1997)。実は、この里山分布と「ため池」の分布ベルトとがよく重なっているのです。かつての里山地域は、焼き畑農耕の場、あるいは薪炭や刈藪採集の場として、人の働きと強く結びついた「原風景」ともいべき独自の農村風景を形成していたと考えられます。こんなこともあって「維摩池」の今昔に興味をもち、少し調べてみました。

インターネットで検索すると、名古屋産業大学論集に維摩池周辺開発に関する論文を見つけました(諏訪、2004)。

尾張旭市は元々農業が盛んで、農業用貯水池が市内に多数存在し、維摩池もそのような農業用貯水池の一つである。この辺り一帯の地質は、新生代第三期鮮新世に属する堆積層で、瀬戸層群矢田川累積として知られている。これは、元々この地域が今から 650 万年前に東海湖と呼ばれる巨大な湖を形成していたことに由来する。このような特殊な土壌を背景に同地帯では非常に特異な植生と、それに従属する動物群が生息しており、多くの動植物がレッドデータブックにリストアップされている。希少動植物の宝庫とされている愛知万博開催予定地であった海上の森に限らず、尾張東部丘陵一帯は我が国の地質学・植物学等の上で、非常に重要な生態系を形成しているのである。

維摩池においては貧栄養層の土壌から浸出した湧水により透明度の高さが保たれ、貧栄養層の水質に生息する水生植物としてノタヌキモ、イヌタヌキモ、ミズスギナ、タチモ、マツモ、オオトリゲモなどが見られた。

この論文から「維摩池」を表すキーワードとしては、農業用貯水池、尾張東部丘陵、湧水、貧栄養層、希少動植物等に代表される丘陵地のもつ自然環境特性と、護岸・道路整備事業等に代表される人工改変特性にまとめることができないでしょうか。

今回試みで行った「維摩池」の水質分析の結果は表 1 の通りでした。なお、植物プランクトン量も知りたくてクロロフィル a のアセトン抽出を試みましたが、分析値として表示できないほど少ない量でした。

表 1 から、電気伝導度は水中の溶けているイオン量を知る目安になるもので、日本の河川水の平均値 $130 \mu\text{S}\cdot\text{cm}^{-1}$ より低く、陸上でも農作物を育てるときに窒素やリンやカリウムなどの肥料を施すように、植物プランクトンが増殖する際には窒素やリンが必要ですが、それらの存在量は貧栄養湖なみの値でした。以上のことから維摩池の水質は、現在も湧水の特性を示す貧栄養状態を維持しているように思われます。しかしながら、有機物指標である COD と濁りの指標である透視度の値は、湧水のわりには高いように思われました。(この辺りの考察は、今後の水質調査を待ちたいと思います。)

表 1 尾張旭市「維摩池」の水質(2008.11.30)

気温 ()	水温 ()	水素イオン 濃度(pH)	透視度 (cm)	電気伝導度 ($\mu\text{S}\cdot\text{cm}^{-1}$)	COD (mg/L)	全窒素 (mg/L)	全リン (mg/L)
10.5	11.5	7.5	48.5	99	3.4	0.26	0.02

釣り人からは、「維摩池」にはコイ、ヘラブナのほかに、肉食性若しくは雑食性である外来魚の「ブラックバス」「ブルーギル」「ライギョ」等が生息している、と聞きました。おそらく人為的に放流されたものと思われる。また別の文献から、諏訪論文に記載されている水生植物は、丘陵地に分布する「ため池」で出現する頻度の高い種類であることもわかりました。

護岸を人工的に改変する工事は、ため池沿岸帯の水生植物群落にも何らかの影響を与えていることが考えられます。水生植物群落が、ため池の生物群集や水質や水辺の自然景観の保全において、重要な役割を果たしていることはいうまでもありません。「維摩池」が今以上に親しまれる親水空間として維持するためには、次のような視点が大事だと考えています。

- ・維摩池とその周辺にある既存のため池との均衡のとれた秩序の維持と増進(生態的回廊)に配慮すること。
- ・これら水域の生態学的自浄能力を保護し、復元するために、生物の働きに注目すること。
- ・生物多様性社会が成立する可能性を高めること。

これからも「維摩池」に足を運んで、時間軸の異なるさまざまな環境データを収集して、これらの視点を補強できたらと願っています。(文責: 田中庸央)

【編集後記】

2008 年も残り僅かになりました。良くも悪くも変化(チェンジ)の多かった一年を反映した結果なのでしょうが、今年を表す漢字一字に「変」が選ばれました。変と恋に共通する「亦」は、旧字では糸がもつれる様をいい、もつれて違う状況になるのが変、好きな人に心もつれるのが恋(12日朝刊の天声人語)。愛研の場合もいくつか「変」「恋」があったと思いますが、明日の愛研を運に任すことなく、これまで培われた愛研文化に新たな愛研文化が躍動する日をみんなで築き上げていきたいものです。

(T.T 記、2008.12.15)